

第6週間の水曜日

第19カフィズマ

第1段 第134、135 聖詠

しゅ な ほ あ しゅ しよぼく しゅ いえ わ かみ いえ にわ た もの ほ
主の名を讃め揚げよ、主の諸僕、主の家、我が神の家の庭に立つ者よ、讃め

あ しゅ ほ あ しゅ じんじ そのな うた こ たの
揚げよ。主を讃め揚げよ、主は仁慈なればなり、其名に歌へ、是れ樂しければな

けだししゅ おのれ ため えら えら そのぎょう
り。蓋主は己の爲にイアコフを選び、イスライリを選びて其業となせり。

われしゅ おおい し われら しゅ しよしん もつともたか し しゅ およ ほつ
我主の大なるを知り、我等の主の諸神より最高きを知れり。主は凡そ欲

ところ てん ち うみ ことごと ふち おこな くも ち はて お いなずま
する所を天に地に海に悉くの淵に行ふ、雲を地の極より起こし、電

あめ うち つく かぜ そのくら いた かれ しよし う ひと
を雨の中に作り、風を其庫より出す。彼はエジプトの初子を撃ちて、人より

かちく およ かれ なんじ うち おい きゅうちようきせき およ
家畜に及べり。エジプトよ、彼は爾の中に於て休徴奇跡をファラオン及び

そのことごと ぼく うえ つかわ かれ おお たみ う ゆうりよく おう ほろぼ
其悉くの僕の上に遣せり。彼は多くの民を撃ち、有力の王を滅せ

すなわち おう おう およ しよこく かれら
り、即アモレイの王シゴン、ワサンの王オグ、及びハナアンの諸國なり、彼等

ち たま ぎょう そのたみ ぎょう しゅ なんじ な なが
の地を賜ひて業となし、其民イスライリの業となせり。主よ、爾の名は永

あ しゅ なんじ きおく よよ あ けだししゅ そのたみ しんばん そのしよぼく
く在り、主よ、爾の記憶は世に在り。蓋主は其民を審判し、其諸僕に

あわれみ た いほう ぐうぞう すなわちぎん すなわちきん ひと て わざ かれらくち
憐を垂れん。異邦の偶像は乃銀、乃金、人の手の造工なり。彼等口

い め み みみ き そのくち いき これ つく もの
ありて言はず、目ありて見ず、耳ありて聽かず、其口に呼吸なし。之を造る者と

およ これ やの もの これ あいに いえ しゅ あが ほ
凡そ之を恃む者とは是と相似ん。イズライリの家よ、主を崇め讃めよ。アア

ロンの家よ、主を崇め讃めよ。レウィの家よ、主を崇め讃めよ。主を畏るる者

よ、主を崇め讃めよ。イエルサリムに在す主はシオンに崇め讃めらる。「ア ril
イヤ」。

<145 聖詠省略>

誦経 光栄は父と子と聖神に帰す。

(詠) 今も何時も世々に、「アミン」

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光栄は爾に帰す。(三次)

主憐めよ。(三次) 光栄は父と子と聖神^oに帰す。

誦経者の「光栄は」に続いて



今も 何時も 世々に アミン ア ril イヤ、ア ril イヤ ア ril イヤ

3回



神よ光栄は なんじに 帰す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、



光栄は 父と子と 聖神に帰す

誦経者の「今も」に続く

誦経 今も何時も世々に、「アミン」。

第二段 第 137-139 聖詠

われこころ つく なんじ さんえい しょてんし まえ おい なんじ うた けだしわ くち
我 心を盡して爾を讃榮し、諸天使の前に於て爾に歌ふ、蓋我が口の

ことば なんじことごと これ き われなんじ せいでん まえ こうはい なんじ あわれみ
言は爾 悉く之を聴けり。我爾が聖殿の前に叩拜し、爾の憐と

なんじ しんじつ たため なんじ な さんえい けだしなんじ なんじ ことば こうだい
爾が眞實の爲に爾の名を讃榮す、蓋爾は爾の言を廣大にして、

もろもろ なんじ な こ わよ ひ なんじわれ き わ たましい いさ
諸の爾の名に逾えしめたり。我が呼びし日、爾我に聴き、我が靈を勇

しゅ ち しょおうなんじ くち ことば き とき みななんじ さんえい しゅ
ませたり。主よ、地の諸王爾が口の言を聴かん時、皆爾を讃榮し、主

みち うた けだししゅ こうえい おおい しゅ たか へりくだ もの み ほこ
の途を歌はん、蓋 主の光榮は大なり。主は高くして、謙 る者を見、誇

もの はるか し われも かんなん うち ゆ なんじわれ い なんじ て の
る者を遙に識る。我若し艱難の中に行かば、爾 我を生かし、爾 の手を伸べ

わ てき いかり おさ なんじ みぎ て われ すく しゅ われ かわ おこな
て我が敵の怒を抑へん、爾 が右の手は我を救はん。主は我に代りて行は

ん、主よ、爾 の 憐 は世世にあり、爾 の手の造りし者を棄つる 母れ。

誦經 光榮は父と子と聖神に歸す。

(詠) 今も何時も世世に、「アミン」

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す。(三次)

主憐めよ。(三次) 光榮は父と子と聖神^oに歸す。

誦經 今も何時も世々に、「アミン」。

第三段 (第140、141、142 聖詠)

しゅ わ いのり き なんじ しんじつ よ わ ねがい みみ かたぶ なんじ ぎ
主よ、我が 禱 を聆き、爾 の 眞實 に依りて我が 願 に耳を 傾 けよ、爾 の義

よ われ き たま なんじ ぼく うったえ な なか けだしおよ いのち もの
に依りて我に聴き給え。爾 の僕と 訟 を爲す母れ、蓋 凡そ生命ある者は、

いつ なんじ まえ ぎ てき わ たましい お わ いのち ち ふみにじ
一も 爾 の前に義とせられざらん。敵は我が 靈 を逐ひ、我が生命を地に 蹂

われ ひさ し もの ごと くらき お わ たましい われ うち もだ
り、我を久しく死せし者の如く 暗 に居らしむ、我が 靈 は我の衷に悶え、

わ われ うち むな ごと われいにしえ ひ おも およ なんじ おこな
我が心は我の衷に曠しきが如し。我 古 の日を想ひ、凡そ 爾 の行ひしこ

かんが なんじ て わざ はか わ て の なんじ むか わ たましい かわ
とを考へ、爾 が手の工作を計る。我が手を伸べて 爾 に向ひ、我が 靈 は渴

ち ごと なんじ した しゅ すみやか われ き たま わ たましい おとろ
ける地の如く 爾 を慕ふ。主よ、 速 に我に聴き給へ、我が 靈 は衰へた

なんじ かんばせ われ かく なか しか われ はか い もの ごと われ
り、爾 の 顔 を我に隠す母れ、然らずば我は墓に入る者の如くならん。我

つと なんじ あわれみ き たま われなんじ たの しゅ われ ゆ
に夙に 爾の 憐を聴かしめ給へ、我 爾を頼めばなり。主よ、我に行くべ

みち しめ たま わ たましい なんじ あ しゅ われ わ てき すく
き途を示し給へ、我が 靈を 爾に擧ぐればなり。主よ、我を我が敵より救

たま われなんじ はし つ われ なんじ むね おこな おし たま なんじ われ かみ
ひ給へ、我 爾に趨り附く。我に 爾の旨を行ふを教へ給へ、爾は我の神

ねが なんじ ぜん しん われ ぎ ち みちび しゅ なんじ な
なればなり、願はくは 爾の善なる神は我を義の地に 導かん。主よ、 爾の名

よ われ い たま なんじ ぎ よ わ たましい くなん ひ いだ たま
に依りて我を生かし給へ、 爾の義に依りて我が 靈を苦難より引き出し給へ、

なんじ あわれみ もつ わ てき ほろぼ およ わ たましい せ もの たいら たま
爾の 憐を以て我が敵を滅し、凡そ我が 靈を攻むる者を 夷げ給へ、

われ なんじ ぼく
我は 爾の僕なればなり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す。今も何時も世に、「アミン」。

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」、神よ、 光榮は 爾に歸す。三次

しゅあわれ
主 憐めよ。三次

<続けて誦経>

齋1 【坐誦讚詞】

こうおん しゅ われいし ごと おお つみ あつ かんまん ひつぎ ふ じれん
宏恩なる主よ、我石の如く多くの罪に壓せられて、簡慢の 軀に臥す。慈憐なる

しゅ われ これ おこ たま
主よ、我を此より起し給へ。二次。

十字架生神女讚詞、

いさぎよ じょさいしょうしんじょ われら みななんじ こ どうと じゅうじか まも たたか てき およそ
潔き女宰生神女よ、我等皆 爾の子の尊き十字架に護られて、戦ふ敵の凡の

こうげき たやす ふせ ゆえ よろ かな なんじ ひかり ははおよ わ たましい ゆいいち たのみ
攻撃を輒く防ぐ。故に宜しきに合ひて 爾を光の母及び吾が 靈の唯一の特頼と

して讃^{さんえい}榮す。

<戻る。 梓 P12、 50 聖詠 >

齋^{カノン}2【三歌經の規程】

第三歌頌、 聖アンナの歌句、列王記第一卷二章一至十節

右誦經句、わ ころろ しゅ よ よろこ わ つの わ かみ よ たか わ
我が心は主に縁りて喜び、我が角は我が神に縁りて高くなり、我

くち わ てき うえ ひら けだしわれ なんじ すくい ため たのし
が口は我が敵の上に開けたり、蓋 我は爾の救の爲に樂む。

左誦經句、しゅ ごと せい もの けだしなんじ ほか た もの わ かみ ごと
主の如く聖なる者あらず、蓋 爾の外に他の者なし、我が神の如

けんご もの
く堅固なる者あらず。

右 句、おご ことば い なか きょうぼう なんじ くち い なか
驕れる言を言ふ勿れ、狂妄をして爾の口より出でしむる勿れ。

左 句、けだししゅ えいち かみ わざ かれ はか
蓋 主は睿智の神にして、行爲は彼に權られたり。

右 句、かれ そのせいしや あし まも ふほう もの くらやみ うち き
彼は其聖者の足を守る、不法の者は幽暗の中に消ゆ。

イルモス 3調「主、爾を頼む者の堅固よ」

しゅ きょうあく こうげき よ よわ わ ちえ なんじ じゅうじか ちから もつ かた
主よ、兇惡なる攻撃に由りて弱りたる吾が智慧を爾の十字架の力を以て堅めて、

なんじ むね むか たま
爾の旨に向はしめ給へ。

蓋人の力を持って堅固なるに非ず、主は之に敵する者を砕かん、主は聖なり。

しゅ いつらく とこ ほうしん ねわり い われ おこ なんじ くるしみ ふくはい もの な
主よ、逸樂の牀に放心の眠に寝ぬる我を起して、爾の、苦に伏拜する者と爲し

たま
給へ。

智者は其の智を以て誇る勿れ、強き者は其の力を以て誇る勿れ、富む者は其の富

を以て誇る勿れ。

我等は靈照され、齋に由りて潔くなりて、往きて肉體を以てイエルサリム
に來るハリストスを迎へん。

誇らんと欲する者は主を悟りて彼を知り、且つ地の中に審判と義とを行ふを以て
誇るべし。

【生神女讃詞】神性の火に焚かれざりし潔き者よ、我が不潔なる諸慾を焚き給へ、

我が熱心に爾潔き者を讚榮せん爲なり。

イルモス「果を結ばざる子なき靈よ」(3調)

主は天に升起て轟けり、彼は義にして地の極を審判せん。

今日死せしラザリはイイススの見ざる所なき目に隠れざりき。故に彼は門徒に之

を言ひて呼ぶ、我等の友ラザリは寝ねたり、我往きて彼を復活せしめん。

彼は力を以て其の王に賜ひ、其の膏つけられし者の角を高くせん。

主よ、爾は復イウデヤに往かんと言ひて、門徒を畏れしめたり、然れどもフオマ

は毅然として呼べり、彼は生命なり、我等も往かん、蓋死すとも復生きん。

光榮は父と子と聖神^oに歸す。

【聖三者讃詞】一性なる三者、全能の父、同無原の子、同座の聖神、惟一に伏拝せら
るる造られざる神性よ、我等衆人は爾を歌ふ。

今も何時も世々に、「アミン」

【生神女讃詞】 至しじょう浄どうていじよなる童はは貞ね女もの母ち、イエうまッセイものの根いのちなる者をよ、地ちに生うまるる者ものに生いのちを

施ほどこす花はなたるハリスなんじトスは爾かがやより輝いさぎよけり。潔ものき者われらよ、我等みななんじ皆爾よに由きゆうかいりて朽およ壊およ及

び死しより救すくはれて、爾なんじを歌うたふ。

我等の神よ、光榮は爾に帰す、光榮は爾に帰す。

シオンよろこよ、慶いまおんじゆうべ、今なんじ温おう柔のぞなる爾よげんの王しやは臨よむ、預ごと言わかきう者さきぎうの呼まびしが如まし。小ま 驢ま は

肉にくたい體これにて之のに乗しゆる主おのれ、己ての手に萬ばんぶつ物たもを持ち、我等われらが其その權けん能のうを歌うたふ者ものを載のす。

イルモス 3 調 「果を結ばざる子なき霊よ、栄たる果を獲て、楽しみて呼べ、神よ、我爾に縁りて堅められたり、主よ、爾の外に聖なるはなく、義なるはなし。」

第3歌頌



実みを結むばざる たまましいよ、栄みたる果みを 得えて、
たのしみて 呼よべ かみみよ、爾なんじによつて固かめられたり。
主まよ、爾なんじの他たに 聖せいなるはなし 義ぎなるはなし

【小連禱】

我等復又安和にして主に禱らん。 (詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ。 (詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。 (詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)

「アミン」



第8歌頌

右誦經句 ^{しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ}
 主の 悉 くの 造物 は主を 崇め讃めよ、彼を 歌ひて 世々に 讃め揚げよ。

左誦經句 ^{しゅ しょてんし しゅ しょてん しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ}
 主の 諸天使、主の 諸天 は主を 崇め讃めよ、彼を 歌ひて 世々に 讃め
 あ
 揚げよ。

右 句 ^{しょてん うえ あ みず しゅ ばんぐん しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ}
 諸天 の 上に 在る 水、主の 萬軍 は主を 崇め讃めよ、彼を 歌ひて 世々に 讃
 あ
 め揚げよ。

左 句 ^{ひ つき てん ほし しゅ あが ほ かれ うた よよ ほ あ}
 日と 月と、天の 星は 主を 崇め讃めよ、彼を 歌ひて 世々に 讃め揚げよ。

右 句 ^{てん もろもろ とり やじゅう いっさい かちく しゅ あが ほ かれ}
 天の 諸 の 鳥、野獣 と 一切 の 家畜 と 主を 崇め讃めよ、彼
^{うた よよ ほ あ}
 を 歌ひて 世々に 讃め揚げよ。 八段に、

イルモス「昔シナイ山に於て棘の中に」。

^{もろもろ} 天の 諸 の 位鳥、野獣 と 一切 の 家畜 と 主を 崇め讃めよ、彼を 歌ひて 世々に 讃め揚げよ、

ハリストスよ、我が 卑微なる ^{わ ひび たましい はなはだ ほうしん おも いし さ われ むかんかく} 靈 の 甚 しき 放心の 重き 石を 去り、我を 無感覺の

^{ひつき おこ なんじ ことば さんえい たま}
 枢より 起して、爾を、言よ、讃榮せしめ給へ。

人の 諸子は 主を 崇め讃めよ、イスライリ民は 主を 崇め讃めよ、彼を 歌ひて 世々に 讃め揚げよ、

ぜんちしゃ およ かみ なんじ じれん おお よ なんじ とも し おのれ とも よげん かつかれ よつかめ
前知者及び神よ、爾は慈憐の多きに因りて、爾の友の死を己の友に預言し、且彼四日

ししゃ もの なんじ こうえい ため はか おこ さだ たま
の死者たる者を、爾の光榮の爲に、墓より起さんことを定め給へり。

ほ あ
主の司祭等、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

なんじ き み しょく ころ もの ふし たま ほつ なんじ
ハリストスよ、爾は木の果の食にて殺されたる者に不死を賜はんと欲して、爾

いのち き しゅ き ころ はか またおもむ たま
生命の樹たる主を木にて殺さんことを謀るイウデヤに復赴き給ふ。

たましい けんび ほ
諸神^{*}と諸聖人の 靈 と、諸義人と心の謙卑なる者と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて

ほ あ
世々に讃め揚げよ、

いさぎよ どうていじょ なんじ おい ことごと かみ みち み くれ さん のち なんじ
〔生神女讃詞〕 潔き童貞女よ、爾に於て悉く神の途は見られたり、彼は産の後に爾

ていけつ まも これ ぼんせい ふう もの な たま
の貞潔を護りて、之を萬世に封ぜられたる者と爲し給へり。

イルモス「無原なる父より世世の前に生れし神」。

ほ あ
アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

とも し こんにち ほうむ およ とも あ
ハリストスの友たる死せしラザリは今日葬られ、マリヤ及びマルファと共に在る

もの みな な よろこび もつ くれ ゆ たま ひとびと おのれ しゅうじん いのち
者は皆哭く。ハリストスは喜を以て彼に往き給ふ、人人に己が衆人の生命た

しめ ため
るを示さん爲なり。

ほ あ
主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

ひとびと エレオンざん ごと じけい たか しょとく えだ き きた
人人よ、橄欖山よりするが如く、慈恵の高きより諸徳の枝を伐り來りて、ハリス

トスの見え^みずして我等^{われら}に来^{きた}るを迎^{むか}へ、彼^{かれ}を崇^{あが}め歌^{うた}ひて、萬世^{ばんせい}に讃^ほめ揚^あげん。

ほ
我等^{われら}主^{しゅ}なる父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{じん}とを崇^{あが}め讃^ほめん。

〔聖三者讃詞〕 三位^{さんい}の惟^{ゆい}一^{いち}者^{しゃ}、父^{ちち}、子^こ、及^{およ}び生活^{せいかつ}の神^{かみ}、惟^{ゆい}一^{いち}の神^{しん}性^{せい}、惟^{ゆい}一^{いち}の國^{くに}よ、天使^{てんし}
の軍^{ぐん}は爾^{なんじ}暮^くれざる光^{ひかり}を讃^{さん}榮^{えい}す、我^{われら}等^{ちじょう}地上^{もの}の者^{なんじ}も爾^{あが}を崇^{うた}め歌^{うた}ひて、萬世^{ばんせい}に讃^ほめ揚^あ
ぐ。

今も何時^{いま}も世^よ々に、「アミン」

〔生神女讃詞〕 至^{しじょう}淨^{もの}なる者^みよ、視^{われら}よ、我^{ばんぞく}等^{なんじ}萬^{だいじ}族^みは爾^{なんじ}の大事^{さんよう}を見て、爾^{けだしなんじ}を讃^ほ揚^あす、蓋^あ爾^あ
は性^{せい}に超^こえて萬^{ばん}有^{ゆう}の造^{ぞう}成^{せい}主^{しゅ}、神^{かみ}及^{およ}び人^{ひと}なる者^{もの}を生^うみ給^{たま}へり。故^{ゆえ}に我^{われら}等^{なんじ}爾^{あが}を崇^あめて
萬世^{ばんせい}に讃^ほめ揚^あぐ。

我等^{われら}の神^{かみ}よ、光^{ひかり}榮^{えい}は爾^{なんじ}に帰^{かへ}す、光^{ひかり}榮^{えい}は爾^{なんじ}に帰^{かへ}す。

我^{われら}等^{われら}も童^{わらべ}子^{とも}と共^{とも}にハリス^{かみ}トス^{むか}神^{かみ}を迎^{むか}へ、枝^{えだ}に易^かへて慈^じ恵^{けい}を心^{こころ}の祈^{きとう}禱^{うち}の中^{うち}に捧^{もち}げ、
梢^{こずえ}を執^とりて呼^よばん、「オサンナ」、主^{しゅ}を崇^{あが}めて、萬世^{ばんせい}に讃^ほめ揚^あげよ。

(詠) 我等^{われら}主^{しゅ}を讃^ほめ、崇^{あが}め、伏^{ふし}し拝^{はい}みて世^よ々に歌^{うた}ひ讃^ほめん、

(詠) イルモス 3調 「無^む原^{げん}なる父^{ちち}より、世^よ世^よの前^{まへ}に生^なまれし神^{かみ}、末^{すえ}の日^ひに生^な神^{かみ}女^にに籍^{せき}り
て肉^{にく}体^{たい}を衣^いたる主^{しゅ}を、完^{かん}き人^{にん}及^{およ}び真^まの神^{かみ}として崇^{あが}め歌^{うた}ひ、萬世^{ばんせい}に讃^ほめ揚^あげよ。」

第8歌頌

我等^{われら}神^{かみ}を讃^ほめ崇^{あが}め 伏^{ふし}し拝^{はい}みて 世^よ世^よにう たーい 讃^ほめん。
無^む原^{げん}なる ちち より 世^よ々^々の前^{まへ}に生^なまれし か み

すえの日に 生神女によって 肉体を衣たる主を
 全き人、および 真の神として 崇めうたい
 萬世に 讃めあげよ。 ヘルビムよりへ
ばん せい

司祭 生神女光の母を讃歌を以て讃め揚げん。

(詠) [ヘルビムの歌]

第1句 我が心は主を崇め、我が靈は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、
 実の生神女たる爾を崇め讃む。

第1句
 我が心は主を あがめ 我が靈は神我が救主を 喜こぶ
 附唱
 ヘルビムより尊とく セラフィムに並びなく さかえ 貞操を
 破らずして神言を生みし 実の生神女たる 爾をあげ讃む

第2句 その婢の卑しきを顧み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、→附唱 **ヘルビムより尊く**

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れ
 みは世世 彼を畏るる者に臨まん →附唱 **ヘルビムより尊く**

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、→附唱 **ヘルビムより尊く**

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなし
く帰らせ給へり。 →附唱 ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世
に憐れむ事を記憶し給へり、 →附唱 ヘルビムより尊く

第9歌頌

右誦經句 ^{しゆくさん} 祝讚 ^{かな} せらるる ^{しゆ} 哉、主 ^{かみ} イズライリの ^{けだし} 神、蓋 ^{その} 其 ^{たみ} 民を ^{かえり} 眷 ^{これ} みて、之 ^{あがない} に 贖

を爲し、

左誦經句 ^{われら} 我等の ^{ため} 爲 ^{すくい} に 救 ^つ の ^{その} 角 ^{ほく} を 其 ^{いえ} 僕 ^{おこ} ダウイドの ^{いえ} 家 ^{おこ} に 興 ^{おこ} せり、

右 句 ^{こせい} 古世より ^{そのせい} 其 ^{よげんしゃ} 聖なる ^{くち} 預言者の ^{もつ} 口 ^い を 以 ^{ごと} て 言 ^い ひしが 如 ^い し、

左 句 ^{すなわち} 即 ^{われら} 我等 ^わ を 我 ^{しよてき} が ^{およ} 諸敵 ^{およ} 及び ^{われら} 凡 ^{にく} そ ^{もの} 我等 ^て を 悪 ^{すく} む者 ^{すく} の ^て 手 ^{すく} より 救 ^{すく} ひ、

右 句 ^{もつ} 以 ^{あわれみ} て 矜 ^わ 恤 ^{せんぞ} を 我 ^{ほどこ} が ^{そのせい} 先祖 ^{やく} に 施 ^{すなわち} し、其 ^そ 聖 ^そ なる ^そ 約 ^そ 、 即 ^そ 我 ^そ が ^そ 祖 ^そ アウラアム

^{ちか} に ^{ちかい} 矢 ^{きねん} ひたる ^{きねん} 誓 ^{きねん} を 記念 ^{きねん} せん、

イルモス「童貞女が孕める者と現れて」。

ダニイルは ^{ものいみ} 齋 ^{まも} に 護 ^{まも} られて、^{もうじゆう} 猛獸 ^{くち} の ^{とぎ} 口 ^{とぎ} を 閉 ^わ せり。我 ^{たましい} が ^{これ} 靈 ^{なら} よ、之 ^ほ に 效 ^ほ ひて、吼 ^ほ ゆ

る ^{しし} 獅子 ^{ごと} の 如 ^{およそ} く、凡 ^{たましい} の ^{しよく} 靈 ^な を 食 ^{はか} と 爲 ^{へび} さんと 謀 ^{じゆうじか} る ^{たすけ} 蛇 ^{もつ} を 十 ^お 字 ^{しりぞ} 架 ^{しりぞ} の ^{しりぞ} 助 ^{しりぞ} を 以 ^{しりぞ} て 遂 ^{しりぞ} ひ 斥 ^{しりぞ} けよ。

^い 謂 ^{おそれ} ふ、我 ^{おそれ} 等に ^{おそれ} 我 ^{おそれ} が ^{おそれ} 諸 ^{おそれ} 敵 ^{おそれ} の ^{おそれ} 手 ^{おそれ} より 救 ^{おそれ} はれ ^{おそれ} し 後 ^{おそれ} 、 懼 ^{おそれ} なく、彼 ^{おそれ} の ^{おそれ} 前 ^{おそれ} に 在 ^{おそれ} りて、聖 ^{おそれ} を 以 ^{おそれ} て、

義 ^{つか} を 以 ^{つか} て、生 ^{つか} 涯 ^{つか} 彼 ^{つか} に 事 ^{つか} へしめんと。

^{かみ} 神 ^{ことば} 父 ^{てん} の ^{ほうぎ} 言 ^な 、天 ^ち を 寶 ^{あし} 座 ^{だい} と 爲 ^な し、地 ^{しゆ} を 足 ^{わかさう} の 凳 ^{さぎう} と 爲 ^ま す 主 ^の は 小 ^{せい} 驢 ^{まち} に 乗 ^{まち} せられて、聖 ^{せい} なる ^{まち} 城 ^{まち}

に入り給ふ、萬有の王として嬰兒の口より嘉く納れらるる讚美を受けん爲なり。

子よ、爾も至上者の預言者と称へられん、蓋主の面前に行きて其の道を備へん、

神父の言、天を寶座と爲し、地を足の凳と爲す主は小 驢 に乗せられて、聖なる城

に入り給ふ、萬有の王として嬰兒の口より嘉く納れらるる讚美を受けん爲なり。

彼の民に、其救は 即 諸罪の 赦 にして、我が神の矜恤に因ることを知らしめん。

[生神女讚詞] 嗚呼至りて奇妙なる 潔き者よ、爾は獨女の中に美しく 妝はれて、

衆人より美しき者と現れたる至りて美しき言を生み給へり。童貞女よ、吾が心

の汚を潔めんことを彼に祈り給へ。

イルモス「モイセイはシナイ山に於て」。

此の矜恤に因りて、東旭は上より我等に臨めり、

ラザリの姉妹は今日親族が石に掩はれたるを見て、葬の涙を流す。然れども吾

がハリストスは遠くありて之を使徒に語りて告げたり、我爾等の爲に喜ぶ、蓋

肉體にて彼處に在らざりき。

幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん爲なり。

兇殺者たるイウデヤよ、ハリストスは神として救を施す 苦を受けんと欲して

復爾に往く。爾が石を以て殺さんと謀りし者は、視よ、親ら 爾より死を受け

ん爲ために來きたる、我等われらを救すくはん爲ためなり。

光榮は父と子と聖神^oに帰す

〔聖三者讃詞〕 神は惟一かみ ゆいいちにして三者さんしやなり、嗚呼ああ至榮しえいなる眞理しんりや、性せいに於おいて惟一ゆいいちにして

分離ぶんりせざる者ものは、位いに於おいて分わかれて、一いつなる者ものは三さんと爲なり給たまへり、是これ父ちちと子こと生活せいかつ

の神しん、萬有ばんゆうを護まもり給たまふ神かみなり。

今も何時も世々に、「アミン」

〔生神女讃詞〕。子こを生うむ童貞女どうていじよ、又夫またおつとに與あずからざる母ははの事ことを誰たれか聞ききたる、マリヤよ

爾なんじは奇跡きせきを行おこなひ給たまふ然しかれども是これ如何いかに、我われに言いへ。我わが神かみを生うみし産さんの深ふかき

を窮きわむる勿なかれ、是この奥密おうみつは實じつに人ひとの智慧ちえに超こゆ。

我等の神よ、光榮は爾に帰す、光榮は爾に帰す。

われら 桜欄しゅろの枝えだを執とり、内心ないしんと外形がいけいとを以もつて出いでて、我等われらに來きたる主宰しゅさいを迎むかへん 蓋けだし

眞まことの子ことして主しゅおよ及び父ちちの名なに因よりて來きたる者ものは祝福しゅくふくせらる。

イルモス 3 調 「モイセイはシナイ山に於て棘の中に爾を焚かれずして神性の火を胎内に孕みし者として觀、ダニイルは爾を截られざる山として觀、イサイヤは芽を萌しし杖、ダヴィドの根より出でし者なりと呼べり。」

第9歌頌

モイセイは シナイ山において、棘いばらのうちに

神聖の火を胎内にはらみしものとして



ダニイルは 爾を 切られざる やまと 見て
 イサイヤは 芽を きざしし つえ、ダヴィドの根より
 出でし者なりと 呼べり 常に福へ

〈戻る。枠の P15「常に福」へ〉

齋3 くづけ スティヒラ 【挿句の 讃頌】

イズライリは紫布と絳布とを衣て、聖衣と王服とに耀き、律法と預言者とに富みて、律法の奉事を樂しめり、然れども、恩主よ、爾貧しくなりし者を門の外に十字架に釘せり。釘せし後爾活きて神父の懐に永在する主を受けずして、恩寵の一滴に渴く、紫布と絳布とを衣たる無慈悲なる富める者が滅えざる火に入りて、貧しきラザリよりの一滴に渴くが如し。イズライリは苦しみて、先に眞理の屑に乏しかりし異邦人が今アウラムの信の懐に温められ、爾の血の紫布と洗禮の細布とを衣、爾の恩賜に富み、之を樂しみて、ハリストス我等の神よ、光榮は爾に歸すと言ふを見る。

(本来は2回)

句) 主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡

び樂しまん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂

しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其

諸子に著れん。

(スティヒラ繰り返し略)

句) 願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等

に助け給へ、我が手の工作进行を助け給へ。

【致命者讃詞】

至りて讚美たる致命者よ、憂患も、困苦も、飢渴も、窘逐も、創痕も、猛獸の猛

きも、刀劍も、烈しき火も爾等を神より離すこと能はざりき。爾等は更に彼を愛

する愛を燃して、他人の身に在るが如く闘ひて、性を忘れ、死を顧みざりき。故

に宜しきに合ひて爾等の苦の報を受け、天國の嗣と爲れり。息めずして我が

靈の爲に祈り給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

【十字架生神女讃詞】仁愛なるハリストスよ、潔く爾を生みし者は爾地を水の上

に懸けし主が懸りたるを見て呼べり、哀しい哉、斯の驚くべき顯見は何ぞ甘愛

なる子よ爾の無量なる美麗は奈何ぞ隠れたる。我爾の慈憐を讚揚す爾自由

に衆人の爲に苦しめばなり。

←戻る。 **枠** P19「至上者よ」へ

六時課

齋4【預言のトロパリ】 1 調

主よ、爾の慈憐を我等に垂れて、我が不法に我等を付す母れ。聖なる主宰全能者

よ、我等爾に祈る。

◆ポロキメン第4調

司祭 謹みて聴くべし。

誦經 **ボロキメン** 提綱、主の諸僕よ、讃め揚げよ、主の名を讃め揚げよ。(詠)繰り返す

大齋第6週 水曜日:(4調)

主の 諸僕 よ 讃め揚げよ、 主の名を 讃めあげよ

誦經 (句) 願はくは主の名は崇め讃められて今より世世に至らん。

誦經 主の諸僕よ、讃め揚げよ、(詠)主の名を讃め揚げよ。

司祭 睿智。

誦經 イサイヤの預言書の讀

主是くの如く言ふ、大に呼べ、自ら禁むる母れ、爾の聲を籟の如く舉げよ、我が

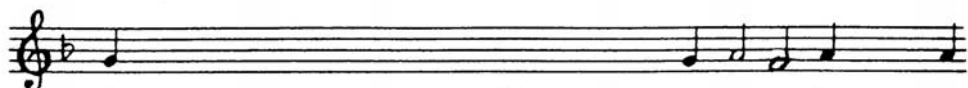
民に其不法を示し、イアコフの家に其諸罪を示せ。彼等日日我を尋ね、我が道を

し 知らんと欲す、^{ほつ}義^ぎを行^{おこな}ひて其^{その}神^{かみ}の法^{ちか}を棄^{のぞ}てざる民^{なんす}の如^{われら}し、彼^{もの}等^{いみ}我^{なんじ}に義^{これ}の鞫^みを問^わひ、
 神^{かみ}に近^{ちか}づかんこと^{のぞ}を望^{なんす}む、胡^{われら}爲^{もの}れぞ我^{いみ}等^{なんじ} 齋^{なんじ} するに、爾^{なんじ}之^{これ}を視^みざる、我^わが靈^{たましい}を
 ひく 卑^{なんじ}くするに、爾^し之^いを知らざると云^みふ。視^{なんじ}よ、爾^{なんじ}等^{もの} 齋^い の日^ひに己^{おのれ}の旨^{むね}を行^{おこな}ひ、他人^たに
 には重^{おも}き苦^{くろう}勞^うを促^{なが}す。視^みよ、爾^{なんじ}等^{もの} 齋^い するは、相^あ争^いひ、相^あ闘^いぐ爲^{ため}、狂^{きやう}暴^{ぼう}の手^てを以^{もつ}
 て他人^たを撃^うつが爲^{ため}なり、爾^{なんじ}等^{もの}が今^{いま} 齋^い するは、爾^{なんじ}等^{もの}の聲^{こゑ}の上^うに聞^きえん爲^{ため}にするに非^{あら}
 ず。我^わが選^{えら}びし 齋^{もの}、人^{ひと}が其^{その}靈^{たましい}を卑^{ひく}くする日^ひは此^かくの若^{ごと}きか、此^これ其^{その}首^{こうべ}を葦^{よし}の
 ごと 如^ふく俯^あせ、麻^あと灰^{なんじ}とを己^{もの}の下^いに敷^あくに在^なるか、爾^{なんじ}之^{これ}を 齋^{もの}、又^{また}主^{しゆ}の悦^{よろこ}ぶ日^ひと名^な
 づけんか。我^わが選^{えら}びし 齋^{もの} は左^さの如^{ごと}し、不^ふ義^ぎの縛^なを釋^とけ、軛^{くびき}の索^{つな}を解^{ほど}け、虐^{しいた}げら
 るる者^{もの}を縦^{ゆる}せ、凡^{すべ}ての軛^{くびき}を折^おれ、饑^ううる者^{もの}に爾^{なんじ}の糧^{かて}を分^{わか}て、徨^{さまよ}へる貧^{ひん}者^{じゃ}を爾^{なんじ}の
 家^{いえ}に納^いれよ、裸^{はだか}なる者^{もの}を見る時^{とき}之^{これ}に衣^きせよ、爾^{なんじ}の骨^{こつ}肉^{にく}の者^{もの}より匿^{かく}るる母^{なか}れ。其^{その}時^{とき}
 爾^{なんじ}の光^{ひかり}は 暁^{あかつき}の如^{ごと}く顯^{あらわ}れ、爾^{なんじ}の醫^いは 速^{すみ}に進^やみ、爾^{なんじ}の義^ぎは爾^{なんじ}の前^{まえ}に行^ゆき、主^{しゆ}
 の光^{こう}榮^{えい}は爾^{なんじ}に伴^{とも}はん。其^{その}時^{とき}爾^{なんじ}聲^{こゑ}を發^{はつ}せば、主^{しゆ}は聽^きかん、籲^よばば、彼^{かれ}は我^{われ}此^こに在^あ
 りと云^いはん。爾^{なんじ}己^{おのれ}の中^{うち}より軛^{くびき}を除^{のぞ}き、指^{ゆび}を舉^あげて侵^おし慢^ある事^{こと}を言^いふを息^いめ、爾^{なんじ}
 の靈^{たましい}を饑^ううる者^{もの}に予^{あた}へ、苦^{くる}しむ者^{もの}の靈^{たましい}を飽^あかしめば、其^{その}時^{とき}爾^{なんじ}の光^{ひかり}は暗^{やみ}の中^{うち}に
 出^いで、爾^{なんじ}の暗^{やみ}は晝^{ひる}の如^{ごと}くならん、且^{かつ}主^{しゆ}は恒^{つね}に爾^{なんじ}を導^{みちび}かん。

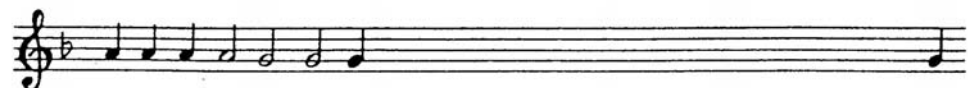
〈→ 梓へ戻る P36〉

晩 課

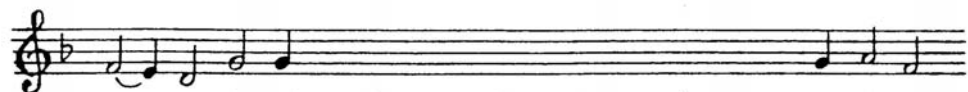
齋 5 【主よ、爾によぶ】を5調で歌う



主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ主やわれに



ききたまえ主や汝に呼ぶすみやかに我れにいたりた



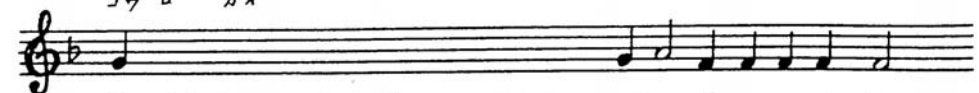
ま え なじに呼ぶとき我が祈りの声をいれたまえ



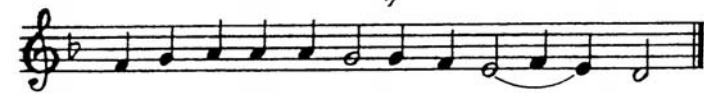
主やわれにききたま え ねがわくは我がいのりは



香コウ炉ロの香カオりのごとく汝がかんばせの前にのほり



我が手をあぐるは暮クれのまつりのごとくいれられん



主やわれにききたま え

誦經 しゅ 主よ、我が口くちに衛まもりを置き、我が唇くちびるの門を扞もんぎ給へ、我が心ふせに

よこしま 邪ことばなる言かたがに傾ふほうきて、不法おこなを行ひとふ人と共に罪ともの推つみ諉いいわけせしむる母なかれ。

わ こえ 我が聲もつを以しゅて主よに籲いび、我が聲もつを以しゅて主いのに禱わり、我が禱いを其その前まえに注そぎ、

わ うれい そのまえ あらわ わ たましいわれ うち よわ とき なんじ われ みち
我が憂を其前に顯せり。我が靈我の衷に弱りし時、爾は我の途を
し わ ゆ みち おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め
知れり、我が行く路に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目
そそ ひとり われ みと もの われ のが ところ わ たましい かえりみ
を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧
もの しゅ われなんじ よ い なんじ われ かくれが い もの
る者なし。主よ、我爾に呼びて云へり、爾は我の避所なり、生ける者の
ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ われ
地に於て我の分なり。我が籲ぶを聴き給へ、我甚弱りたればなり、我を
はくがい もの すく たま かれら われ つよ
迫害する者より救ひ給へ、彼等は我より強ければなり。<中略>

句、我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

せい ちめいしゃ なんじら たましい あい かたぶ あい かれ い
聖なる致命者よ、爾等は靈の愛を傾けてハリストスを愛し、彼を諱まずして、
しゅじゅ くるしみ しの ざんぎやくしゃ きょうぼう たお くつ たわ しん まも てん うつ
種種の苦を忍び、殘虐者の強暴を倒し、屈せず撓まざる信を守りて、天に移り
たま ゆえ しゅ まえ いさみ たも われら おおい あわれみ たま いの たま
給へり。故に主の前に勇敢を有ちて、我等に大なる憐を賜はんことを祈り給へ。

句、願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

イススよ、爾は身にてイオルダンの彼の方を周りに、爾と偕に在る者に呼べ
り、友ラザリは已に死して、今葬に付されたり。故に吾が友よ、我爾等の爲に
よろこ けだしなんじら わ み ひと あらわ へんえき かみ し ところ
喜ぶ、蓋爾等は我が見ゆる人と現るれども、變易なき神にして、知らざる所な
きを識らん。然らば往きて彼を活かさん、死が己の勝たれて、全く破らるるを

かんかく ため われあきらか これ な せかい おおい あわれみ たま
感覺せん爲なり。我明に之を爲して、世界に大なる憐を賜はん。

しゅ も なんじ ぶほう ただ しゅ たれ よ た しか なんじ
句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に
ゆるし ひと なんじ まえ つつし ため
赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

われら しんじや およ なら しゅ きとう ごと しんせい おこない つかわ
我等信者はマルファ及びマリヤに效ひて、主に祈禱の如く神聖なる行を遣さん、

かれ きた われら ちえ いまし かんかく もの おこたり はか ふ かみ おそ
彼が來りて、我等の智慧、今死して、感覺なき者として怠惰の墓に臥し、神を畏

おそれ いささか かん いのち うごちから たも もの ふっかつ ため じんじ
るる畏を聊も感せず、生命の動力を有たざる者を復活せしめん爲なり。仁慈な

しゅ むかしなんじ おそ らいりん もつ なんじ とも おこ ごと か われら しゅうじん
る主よ、昔爾が畏るべき來臨を以て爾の友ラザリを起しし如く、斯く我等衆人

い おおい あわれみ たま
を活かして、大なる憐を賜へ。

われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの
句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

すで ふつか はか うち あ こせい し もの み かしこ おどろ おそ
ラザリは已に二日墓の中に在りて、古世より死せし者を見、彼處に驚くべく畏る

こと あ じごく なわめ しば わりよう たいすう み かれ しんぞく そのほか おのれ
べき事に遇ひ、地獄の縲紲に縛らるる無量の大數を見る。彼の親族は其墓を己の

まえ み はなはだ な しか ゆ おのれ とも い しゅう
前に見て、甚しく哭く。然れどもハリストスは往きて己の友を活かして、衆に

こえ ととの うた きゅうせいしゅ なんじ あが ほ われら あわれ たま
聲を調へて歌はしめん、救世主よ、爾は崇め讃めらる、我等を憐み給へ。

<以下 月課經より 略>

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す。今も何時も世々にアミン

<その週の調の生神女讃詞>

<→戻る、粹 P60 「聖にして福たる」>

齋6 【ポロキメン】と旧約聖書の読み

輔祭 謹みて聴くべし

司祭 衆人に平安

輔祭 睿智、謹みて聴くべし

誦経 ポロキメン、我^{われ}生^いける者^{もの}の地^ちに在^ありて主^{しゅ}の顔^{かん}の^{ばせ}前^{まえ}に行^ゆかん。(詠)繰り返す



誦経 (句、喜^{よろこ}ぶ、主^{しゅ}の我^わが聲^{こえ}、我^わが祈^{いの}を聴^ききしに因^よる。(詠)繰り返す

誦経 我^{われ}生^いける者^{もの}の地^ちに在^ありて (詠)主^{しゅ}の顔^{かん}の^{ばせ}前^{まえ}に行^ゆかん。

司祭、睿智。

誦経、創世記の讀。

司祭、謹みて聴くべし。

【創世記 43-45 章】

誦経 イオシフの兄弟は其手に持てる禮物を家に攜へ入りて、彼に獻じ、地に

伏して彼を拜せり。イオシフ彼等に問ひて曰へり、爾等恙なきか、又曰へり、爾等

の父、爾等が言ひし所の老人は健なるか、尚存するか。彼等曰へり、爾の僕、

我等の父は健にして、尚存す。彼曰へり、斯の人は神に祝せらるる者なり。彼等

俯伏して拜せり。イオシフ目を擧げて、其同母の弟ウェニアミンを見て曰へり、

是は爾等の季の弟、爾等が我に攜へ至らんと言ひし者なるか、又曰へり、子よ、

願ねがはくは神かみは爾なんじに恵めぐみを施ほどこさん。是ここに於おいてイオシフ其その弟おとうとの爲ために心こころ焚やくが如ごとくな
 るに因よりて、急いそぎて泣なくべき處ところを尋たずね、室しつに入りて彼處いに泣かしこけり。而なして面しょうを
 洗あらひて、出いでて自みづから抑おさへたり。遂つひにイオシフは其その旁かたわらに立たてる人ひと人の前まへに自みづから制せい
 する能あたはずして呼よべり、衆しゅうを我われより離はなれしめよ。一いち人もイオシフの旁かたわらに無むかり
 し時とき、彼かれは己おのれを其その兄弟きょうだいに識しらしめたり。彼聲かれこゑを放はなちて泣なけり、エギプト人じん皆みな之これを
 聞きき、ファラオンの家いえにも聞きえたり。イオシフ其その兄弟きょうだいに謂いへり、我われはイオシフな
 り、我わが父ちち尚なお存ぞんするか。兄弟きょうだい彼かれに答こたふる能あたはざりき、驚おどろき懼おそれたればなり。イ
 オシフ其その兄弟きょうだいに謂いへり、我われに近ちかづけ。彼等かれら近ちかづきたれば、曰いへり、我われは爾等なんじらの弟おとうと
 イオシフ、爾等なんじらがエギプトに賣うりたる者ものなり、然しかれども今いま爾等なんじら我われを此ここに賣うりしを
 もつうれなからん、自みづから恨うらむる勿なかれ、蓋なか神かみは爾等なんじらの生命いのちを救すくはん爲ために、我われを爾等なんじら
 の先さきに遣つかわせり、此この二年にねんの間あいだ饑饉ききん地に在ありしが、尚なお五年ごねんありて、其間そのあいだは耕たがすこ
 とも穫かることなからん、神かみは爾等なんじらの後のちを地ちに存のこさん爲ため、又大またなる救またを以すくいて爾等なんじら
 の生命いのちを救すくはん爲ために、我われを爾等なんじらの先さきに遣つかわせり。然しからば我われを此ここに遣つかわしし者ものは、爾等なんじら
 に非あらず、乃すなわち神かみなり、彼かれは我われを以もつてファラオンの父ちちの如ごとき者ものと爲なし、其全家そのぜんかの主しゅと
 爲なし、エギプト全地ぜんちの宰つかさと爲なせり。爾等なんじら速すみに上のぼり、我わが父ちちに詣いたりて彼かれに謂いへ、
 爾なんじの子こイオシフ斯かく云いふ、神かみ我われを立たててエギプト全地ぜんちの主しゅと爲なせり、下くだりて我われに

きた ちたい なか なんじ ち すま か なんじおよ なんじ しょし
 來れ、遅滞する勿れ、爾 アラウィヤのゲセムの地に住はん、斯く爾及び爾の諸子、
 なんじ しょし しょし なんじ ひつじ なんじ うし ならび なんじ すべ しょゆう われ ちか ところ あ
 爾の諸子の諸子、爾の羊、爾の牛、並に爾の凡ての所有は我に近き處に在ら
 ぬ、尚五年の饑饉あるによりて、我彼處に爾を養はん、爾と、爾の諸子と爾の
 すべ しょゆう ほろ ため み なんじら め およ わ おとうと め
 凡ての所有の滅びざらん爲なり。視よ、爾等の目及び我が弟ウェニアミンの目の
 み ごと なんじら これ い もの わ くち なんじら あ わ さかえ およ
 観る如く、爾等に之を言ふ者は我が口なり、爾等エジプトに在る我が榮と、凡そ
 なんじら み ところ ことごと わ ちち つ かついそ わ ちち ここ みちび きた しこう
 爾等が見る所とを悉く我が父に告げ、且急ぎて我が父を此に導き來れと。而し
 て彼は其弟ウェニアミンの頸を抱きて哭けり、ウェニアミンも亦彼の頸に傍り
 て哭けり。亦其悉くの兄弟に接吻し、彼等を抱きて哭けり。其後兄弟彼と語れ
 り。イオシフの兄弟來れりと言ふ聲ファラオンの家に至りたれば、ファラオン及
 び其諸僕は之を悦べり。

輔祭 謹みて聽くべし。

誦經 ポロキメン、我が誓を主に、其衆民の前に償はん。(詠)繰り返す



誦經 (句) 我信ず、故に言へり我孔傷めり。(詠)繰り返す

誦經 我が誓を主に、(詠)其衆民の前に償はん。

輔祭 ^{めい} 命ぜよ。

両手に香炉と火つけた燭台を取り、宝座の前に立ち、東に向かって十字を描いて、

司祭 睿智、肅みて立て。

(それから西に向き直って、会衆に向かって)

司祭 ハリストスの光は衆人を照す。 (このとき会衆は伏拝する。) ¹

司祭、睿智。

誦経、^{しんげん} 箴言 ^{よみ} の讀。

^{おのれ} 己の口と舌とを^{くち} 守る者は^{した} 其^{まも} 靈^{もの} を^{そのたましい} 患難より^{かんなん} 守る。高慢なる^{まも} 悪者を^{こうまん} 侮慢者と^{あくしや} づく、

^{かれ} 彼は^{おごり} 驕を^{たくま} 逞しくして^{おこな} 行ふなり。惰者の^{おこたるもの} 情慾は^{じょうよく} 彼を^{かれ} 殺す、^{ころ} 其手^{その} 勞^{てるう} することを^じ 辭

すればなり。悪者は^{あくしや} 終日^{しゅうじつよく} 慾を^{はか} 圖る、惟義者は^{ただぎしや} 施して^{ほどこ} 吝まず。悪者の^{おし} 祭は^{あくしや} 憎^{まつり} まる、^{にく}

^{いわん} 況や^あ 悪しき^{こと} 事を^{はか} 謀りて^{ささ} 獻ぐる^{とき} 時をや。妄證者は^{もうしようしや} 亡びん、^{ほろ} 知る^し 所^{ところ} を^い 言ふ^{ひと} 人は^{つね} 恒に

^い 言はん。悪しき^あ 人は^{ひと} 其^{そのおもて} 面^{かたくな} を^{ぎしや} 剛愎にし、^{そのみち} 義者は^{なお} 其道^{しゅ} を^{てき} 直くす。主^{ちえ} に^{ちえ} 敵^{ちえ} しては、^{ちえ} 智慧

もなく、^{ゆうき} 勇氣もなく、^{はかりごと} 謀畧も^{うま} なし。馬は^{たたかい} 戦^ひ の^{ため} 日^{そな} の^{しか} 爲^{しょうり} に^{しょうり} 備へらる、然れども^{しょうり} 勝利

は^{しゅ} 主^よ に^{かめい} 由^{おおい} る。嘉名は^{とみ} 大なる^{まさ} 富^{れいぶん} に^{きんぎん} 愈^{まさ} り、^と 令^{もの} 聞^{まず} は^{もの} 金銀^{もの} に^{もの} 愈^{もの} る。富める^{もの} 者と^{もの} 貧しき^{もの} 者と

^{あい} 相遇ふ、^{しゅ} 主は^{とも} 共に^{かれら} 彼等^{つく} を^{さときもの} 造^{わがわい} れり。達者は^み 禍^{みづか} を^さ 見て^{つたなきもの} 自ら^{すす} 避け、拙者は^{ぼつ} 前^{ぼつ} みて^{ぼつ} 罰

を受く。謙遜には^う 神^{へりくだり} を^{かみ} 畏^{おそ} るる^{おそれ} 寅畏^{したが} 従^{とみ} ひ、^{さかえ} 富^{いのち} と^{したが} 榮^{したが} と^{したが} 生命^{したが} と^{したが} 従^{したが} ふなり。

(次に先備聖體禮儀を行ふ)

¹ エルサレムの聖墳墓教会の受難週に灯りを取る儀式から始まったと言われる。